『理趣広経』にみられる「八輻輪」について

研究生　蓮舎　経史

『理趣広経』は『理趣経』が増広されたものといわれるがその成立に不明なところ多い。チベット訳においては漢訳の『理趣広経』に対して二つの経軌が対応しており『理趣経』が増広されたのは、漢訳でいうおよそ十四章までの前半部分であり、チベット訳では『吉祥最勝本初真言儀軌品』という経軌に該当する。

『理趣広経』成立の研究において指標となるものは様々なものが考えられるが、ここでは経中に説示される「八輻輪」、あるいはそれに関係していると思われる説明個所を、十四章までを対象範囲として検証する。

一般的に八輻輪とは輪宝の一種とされるものである。つまり仏を象徴する法輪であり、密教でも法具のひとつとして取り入れられており、多くの経典で象徴としてあるいは道具として登場している。

しかし、今とりあげる「八輻輪」とは道具や象徴としての輪宝ではなく、マンダラ中央部に描かれる法輪状の形態、いわばマンダラとしての「八輻輪」である。

『理趣広経』では各章品においてそれぞれマンダラが説かれる。その中央部分には円形を八区分する車輪状の形態、すなわち「八輻輪」が予想される個所がみられる。そのような記述個所から、まず漢訳より「八輻輪」という用語と、それに相当するチベット訳での用語を想定し、また「金剛輪」という別称もあわせて、それらを確認していった。いっぽうで各章品の内容構成がおおよそ同じであることからマンダラ中央部の説示個所について確認を行った。

その結果、十四章までで十個所に「八輻輪」が描かれると予想される説明がみられた。しかし直接的に「八輻輪」という用語が使用されているのはその内の三個所のみであり、別称として「金剛輪」や「三重の輪」や「八曼荼羅」、さらに注釈書には「八解脱」といった様々な用語がみられた。その他にも中尊を八尊で取り囲むとする形状や、中央輪を八分するといった説明から「八輻輪」を予想することはできるが、形状細部の解説はそれぞれ異なっていた。

つまり『理趣広経』の「八輻輪」はその形状に結びつく説明に統一性が見いだせず、用語自体が一般的に使用されている言葉であると思われる。また各章品における形態の相違は中尊の違いに関係していることは、本経の説示や注釈書の解説からも推察することができる。

「金剛輪」や「八曼荼羅」といったある章品で説かれた別称を他の個所でも適応させてよいか。本尊を中心としてそのまわりをなんらかの理由で、八区分する輪状として示されることが「八輻輪」といってよいか。このような問題を認識したうえで、そもそもなぜマンダラ中央に法輪状のものが描かれるのかという疑問も生まれる。より詳細な検証を加えていくことで『理趣広経』成立の指標として「八輻輪」というものが利用できるものと思われる。